

## 式辞（平成24年度）

平成24年度入学式にあたり、お祝いと歓迎の言葉を申し述べます。新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。日本に約800の大学がある中で、特に本学に入学された縁（えにし）を貴重なものと感じ、心から皆さんを歓迎します。皆さんもこの縁（えにし）を貴重なものと考え、本学との結びつきを大切にさせていただきたいと思えます。また、東日本大震災の被災地からも入学生をお迎えしています。ご家族・ご親戚の方々ともども、言葉では言い尽くせないご苦労を経験されたことと存じます。本学はこの惨事を厳粛に受け止め、誠実に対応してきたつもりですが、これからもこの姿勢を崩さずにやってゆきたいと考えています。



式場風景

東日本大震災から1年が経過しましたが、この間、テレビや新聞などで、震災、津波、原発事故についての論議が交わされなかった日は1日也没有ませんでした。もうすべてが語り尽くされたかと思いきや、まだ何も語られていないの思いの方がはるかに強いというのが実感です。そして、この解決には30年かかるとも50年かかるとも言われています。それは皆さんの人生の大きな部分がそこに含まれることを意味します。大事なことは、ここから眼をそらしながら生きてゆくか、まっすぐにそれを見つめながら生きてゆくか、です。本学は明治19年に、職業によって女性の自立を図ることを目的として設立されましたが、自立とは、社会の担い手となることであり、それは社会が負っている負担を自ら進んで担うということにほかなりません。しかし、それは容易なことではありません。まず、そのための力を蓄えること、それなくしては何も始まりません。そのために皆さんは本学に入られたのであり、そのために我々は全力を尽くす覚悟です。本学は学生の自主的な学びを教育の基本とし、同時に、学生が学生生活を楽しめるよう、数々の配慮をしていますが、この厳しい社会に卒業生を送り出す立場にある者として、学生に必要な力を与えなければならない、そのためにはしやにむに学生を鍛えなければならないという思いが根底にあります。我々の笑顔の裏には、必死の思いが隠されているのだということを、まずご理解いただきたいと思えます。

今年の夏にはロンドン・オリンピックが開催されます。それに先立ってまた聖火リレーが行われることでしょう。ギリシャのアテネで太陽から採火された炎が、数えきれないほど多くの人々のリレーによって国々を巡りロンドンを目指すことになります。ここで、ロンドン・オリンピックが正式決定された日の翌日にロンドンで同時多発テロが発生し、イギリス中の祝祭気分を吹き飛ばしてしまったことが思い出されます。中東地域での悲惨な政治闘争はまだ続いています。さらに、ギリシャの財政破綻がヨーロッパ経済を危機に陥れていることも思われます。こういう中で聖火を運ぶことにどんな意味があるかを問うことは簡単ですが、ここに比喩的な意味を見るならば、人類は、どんな苦境にあっても、つねに何かを運び、伝えようとしていたのではないかと、聖火リレーはそれをかたちとして表したのではないかと、思われるのです。私たちの命は、地球上に生命の発生したその瞬間から、えんえんと伝えられ、私たちに到達したわけですが、しかし、それは人間以外のすべての動物や植物にとっても同じです。人間は生命を伝えると同時に、本能的に、他の何かを、もしかしたら人間としての証（あかし）のようなものを、伝えようとしてきたのではないかと、そして、その意義は、特に東日本大震災後の、混乱と疲弊のさなかにある現在の日本においては、いっそう重みを増しているのではないかと、思われるのです。問題は、私たちの一人ひとりが、前の世代から何を受け取り、次の世代に何を伝えようとしているか、です。自分にとっての聖火はなにか。それを考え、究めるために大学に入ったのだとってください。私たち大学関係者には、ぜひ若い人たちに伝えたいものがあります。その思いには炎のように激しいものがあります。それを伝えるために大学を運営しているのです。ぜひそれを受け取っていただきたいと思えます。そのために、共に努力しようではありませんか。



合唱団による学園歌合唱

最後に、皆さんの本学での学びを可能にくださったご家族の方々に感謝申し上げ、皆さんの学生生活の豊かならんとことを祈念して、式辞とさせていただきます。

平成24年4月2日

共立女子大学  
共立女子短期大学  
学長 入江和生